富岡製糸場総合研究センターだより
No. 26
（2023年4月発行）
富岡製糸場をもっと楽しむための豆知識をお届けします！

旅する建築様式

お雇いフランス人の居館として建設された首長館や女工館、検査人館に採用されている建築様式をコロニアル様式と言います。藤森照信（ふじもりてるのぶ）氏は著書『日本の近代建築』の中でコロニアル様式をさらに「ヴェランダコロニアル」と「下見板（したみいた）コロニアル」の２つに類型化しています。

このうち、ヴェランダコロニアルは大航海時代以来、ヨーロッパ人が進出した暑い地域で生まれた建築様式で、アフリカを回ってインドに至り、東南アジアで南北二つのコースに分かれました。南のコースはオーストラリアに、北のコースは中国を経て日本にたどり着いたと考えられています。富岡製糸場の首長館などに見られるように高温多湿や直射日光を防ぐための高い床やヴェランダ、よろい戸がその特徴となっています。

一方、下見板コロニアルはイギリスから大西洋を渡ってアメリカ東海岸に上陸し、北アメリカ大陸の森林と草原を開拓しながら西海岸へ進むルートで、1878（明治 11）年建設の札幌時計台（旧札幌農学校演武場）に代表されるように下見板張りの壁がその特徴となっています。

日本には東回りルートのヴェランダコロニアルと西回りルートの下見板コロニアルの双方の建築様式が残っています。15 世紀半ばの大航海時代から 400 年にも及ぶ長い旅の終着地の一つが富岡製糸場なのです。

バックナンバーはこちらから▼

◆発行◆
富岡市世界遺産観光部　富岡製糸場総合研究センター